

外国ルーツ高校生の JSL 環境下における 言語と言語的アイデンティティの変遷 ——ライフストーリー・インタビューの手法を用いて——

深石葉子

要約

本研究は、母語がビサヤ語、第二言語が英語の子どもが10歳で来日して以降、日本で暮らしていく中で、どのような言語選択をするのか、言語的アイデンティティはどのように変化するかを明らかにし、外国ルーツ高校生の指導に役立てることを目的とする。そのため、フィリピンルーツの高校生、母親、高校の担任の先生、高校の母語の先生にインタビューを実施し、ライフストーリー・インタビュー法の手法で分析をした。JSL環境下で母語はビサヤ語という言語的アイデンティティは形成されているが、日本社会では日本語が重視され、兄弟間の言語は来日後5カ月程度でビサヤ語から日本語になった。次に日本社会で重視される言語は英語であるという実情から、日本語とのバイリンガルの組み合わせとして威信性の高い英語が選択されている。日本社会で生活するために、母語よりは日本語と英語の優先度が高い状態である。

Language and Linguistic Identity Use of High School Student with Foreign Root in a JSL Environment: Using the Life Story Interview Method

Abstract

The purpose of this study is to clarify how a child whose native language is Visayan and whose second language is English made language choices. How his linguistic identity changed after he came to live in Japan at the age of 10, and to use this information for teaching high school students with foreign roots. To this end, interviews were conducted with a high school student with Filipino roots, his mother, high school homeroom teacher, and high school mother tongue teacher, and analyzed using the life story interview method. The language between his siblings changed from Visayan to Japanese about five months after arriving in Japan. English is chosen as the preferred bilingual combination with Japanese due to the fact that English is the second-most important language in Japanese society. In order to live in Japanese society, Japanese and English are given higher priority than the mother tongue.

キーワード：外国ルーツ高校生, JSL, 言語の選択, 言語的アイデンティティ, ライフストーリー・インタビュー法

I はじめに

1 外国ルーツ高校生の定義, 現状と問題点

本研究は日本の高校に通う, 外国にルーツのある高校生 (以下, 外国ルーツ高校生とする) が, JSL¹⁾ 環境下で第一言語 (人が生まれてから育った環境において自然に身に付ける最初の言語²⁾。以下, L1 とする) であるビサヤ語³⁾, 第二言語 (第一言語の他に習得した言語⁴⁾。以下, 2 番目に習得した言語を L2, 3 番目に習得した言語を L3 とする) である英語, 日本語の 3 言語を学校, 社会, 家庭などでどう使い分けているか, 言語と言語的アイデンティティの変遷についてバイリンガリズムの観点からアプローチする。

外国にルーツをもつ子どもとは, 両親のいずれかが外国にルーツをもち, 高校生以下で, 保護者の就職や結婚のために来日し, 日本の学校で学ぶ子どもをいう。国籍は問わないが, 自身の意志で来日している留学生は除く。

石井他 (2020) によると, 一部の公立高校では日本語指導が必要な生徒の特別入試枠が設定され, 入学後は母語を大切にしながら日本語で学ぶことができるなど, 外国ルーツの子どもの高校への受け入れが進んでいる。しかし, 文部科学省の調査では全国的にみると, 外国ルーツの子どもの高校進学率は 89.9% で全中学生 99.2% よりも 10 ポイント近く低く, 中退率は前回 (2018 年) 9.6% から 6.7% に改善したものの全高校生等 (1.0%) と比較すると, 依然高いことが問題となっている⁵⁾。

2 先行研究

山本 (2013) は, フィリピン諸語のいずれかを母語とするフィリピン出身の親 (以下, フィ親とする) と, 日本語を母語とする日本出身の親からなる, 子どものいる家族 (以下, 日-フィ家族とする) を対象に, 家族内の言語使用や言語継承の状況を調査した。さらに, 日本語と英語の組み合わせの家族 (以下, 日-英家族とする) の言語使用状況と比較し, 言語状況を「言語の威信性」という枠組みのもとに論考している。「言語の威信性」とは, 「言語の話者集団の政治的, 経済的, 社会的な力に応じて, その言語に付与される価値に準じた, 相対的な序列のこと」で, ある集団の政治的, 経済的, 社会的な力が大きければ, その集団が用いる言語には高い価値があるとみなされ, 言語の序列の上位に位置する威信性の高い言語として扱われる。日-英家族では, 日本語と共に英語の使用も活発で, バイリンガル養育の実践にもより積極的であるのに対し, 日-フィ家族では, フィリピン諸語はフィ親自身がほとんど使用しないという, きわめて存在感の稀薄な存在であり, 次世代での確実な言語移行を予測させるような言語状況であったとしている。

ライフストーリー・インタビュー法の手法を用いた研究として, 中川 (2011) は, 日本の社会におけるマイノリティ言語話者のバイリンガル育成の可能性を探ることを目的に, ベトナム難民 2 世の大学生が, 日本語が母語となる中で, 継承語としてのベトナム語とどう向き合っ

きたかを、ライフストーリー・インタビュー法の手法で分析している。日本社会におけるマイノリティ言語であるベトナム語が、日本語母語話者となった2世の子どもたちに受け入れられる様子や、進路決定期にあたる思春期に、親と母語を異にするにも関わらず、コミュニケーションをとる戦略などなどを明らかにしている。

「アイデンティティ」という言葉は研究者によって用いられ方が異なるが、小野原（2004）は、ことばの機能をコミュニケーション機能とアイデンティティ機能の2つに分け、アイデンティティ機能を「自分の存在の主張、確認、自分の価値の証明」としている。本研究における「アイデンティティ」とは、言語的アイデンティティのことを指し、小野原（2024）のいう、「自分の存在の主張、確認、自分の価値の証明をどの言語を使って行うかの選択」と定義する。

3 研究目的と課題

本研究の研究目的は、JSL環境下で複数言語をもつ子どもが、中学から高校の思春期にどのような言語選択をするのか、言語的アイデンティティはどのように変化するのかについて、インタビュー調査をもとに明らかにする。

外国ルーツ高校生の本人のインタビュー研究は筆者の知る限り数少なく、これから増加が予想される外国ルーツ高校生の言語選択や、言語的アイデンティティを明らかにすることには意義があると考えられる。

Ⅱ 研究方法

1 研究協力者の属性

研究協力者A（本研究時16～17歳）は、フィリピン・セブ島で、日本人の父親とフィリピン人の母親の3人兄弟の次男として生まれた。小学校入学前には家庭内では主に母親の母語であるビサヤ語が使われていた。小学校入学後は、Aらが入学したフィリピンの小学校では英語で授業を行うので、小学校では英語で話し、家庭内ではビサヤ語と英語を使用していた。

父親の死後、10歳6カ月で来日し、公立小学校4年に編入した。転校初日の自己紹介は英語で行った。同級生と日本語でスムーズに会話できるようになったのは、5カ月後ぐらいである。公立中学校に進学後は、国語など一部の授業の時間は取り出し授業だったが、ほとんどの時間は教室で日本人母語話者と同じ授業を受けていたという。

Aは中学3年の4月から、ボランティア団体が主催する無料塾H塾に入り、英語と数学の授業を個別で受講した。同年9月から、筆者による日本語の授業を受講している。

中学3年の時点では、H塾の講師や同年代の友達との会話など、日常会話は、日本語母語話者と同レベルだった。しかし、中学校の授業は、英語と実技系の教科以外は、「日本語が理解できない」という状態で、中学3年の成績は、英語はクラスでも上位だが、数学はクラスの平均ぐらい、国語、理科、社会の授業はほとんどわからないので試験で得点できず、成績も良くないという状態であった。つまり生活言語能力は十分だが、学習言語能力は十分ではないという状態だったと推測される。Aの英語の実力を示す事実として、中学3年の冬に英検2級（高校卒業程度）に合格し、さらに高校2年の冬に英検準1級（大学中級程度）に合格している。

関西圏の公立高校に日本語指導特別選抜で合格し、現在、日本語指導が必要な外国ルーツの生徒のクラスに在籍している。国語の授業等は外国ルーツ生徒のクラスで受けているが、その他の科目の授業は一般入試で入学した日本人母語話者と同じクラスで受講している。

インタビュー調査は、Aが16歳11カ月～17歳1カ月時に、A本人、Aの母親、高校の担任の先生、高校の母語（フィリピン語）の先生の計4人に行った。本人以外に、家族や高校の先生の言語観が本人の言語観に影響するのではないかと考え、母親、担任の先生、母語の先生にインタビューを依頼した。

本文中の略称は、研究協力者はA、Aの母親（以下、Dとする）、Aの1歳上の兄（以下、Cとする）、Aの1歳下の弟（以下、Bとする）、Aが通う高校の担任の先生（以下、E先生とする）、Aが通う高校の母語の先生（以下、I先生とする）、英語通訳のJさん（以下、Jとする）、A・B兄弟が通う無料塾（以下、H塾とする）、H塾のボランティアの英語教師（以下、G先生とする）、筆者（以下、Fとする）。

また、インタビュー中に、Aが「フィリピン語」「セブアノ語」と言っているのは、「ビサヤ語」と同義であることは、インタビュー中に確認している。

2 インタビュー調査の分析方法

インタビュー方法は、あらかじめ質問項目をある程度提示する、半構造化インタビューを行った。主な質問は、①母語について、②日本語の勉強について、③英語及びビサヤ語について、④将来についてとこれからの希望など、を尋ねた。主に質問に関わる部分を文字起こしし、ライフストーリー・インタビュー法の手法で分析を行った。

桜井（2002）によると、ライフストーリー・インタビュー法は、個人の語りから社会を読み解くために、聞き手との相互行為から生じた語り手の解釈内容を重視している。また、インタビュー進行中に、語りの内容が産出される契機となる聞き手と語り手のメタコミュニケーション次元の語りも分析対象にすべきと主張する。語り手が「何を」語ったかのみならず、「いかに」語ったかにも着目し、語り手の心の中の表出は聞き手との相互行為によって作り出されるとしている。

本研究は、「外国ルーツ高校生」という集団の特質ではなく、Aという個人の成長の記録であるので、インタビューを語り手と聞き手の相互行為ととらえる、ライフストーリー・インタビュー法の手法が適当であると考えた。

桜井（2002）によると、ライフストーリー・インタビュー法の分析枠組みには、「転機」という概念がある。転機とは、その後の人生を決めた決定的な経験をもとにした「主観的リアリティの変化であり、新しい意味体系の獲得過程のことである。新しい自己像やアイデンティティ形成の関わる過程である」（桜井2002, p236）とされている。

本研究では、Aの「転機」を探り、新しい言語的アイデンティティの獲得がどの時期に行われたのかを探りたい。

インタビュー及び分析にあたって、客観性の担保を最大限に重視するが、筆者がボランティアの日本語教員として週1回の継続的な授業を通して築いた人間関係に基づき知り得た、背景知識、感情など主観的な要素も、細心の注意を払って分析に記していく。これらを含めた分析

がなされることで、全体像をよりの確につかむ努力をする。

Ⅲ 分析結果

A 本人, 母親 D, 高校の担任 E 先生, 高校の母語 (フィリピン語) 担当の I 先生の 4 人のインタビューを行った。これらのインタビューの分析結果を示す。

1 A

A のインタビューは, 17 歳 0 カ月時に, ZOOM で行われた。インタビュー時間は約 65 分。

(1) 母語について

母語については, インタビューの一番最初の質問として提示した。

会話データ 1

F: 母語ってなにか知っている?

A: 自分, 僕やったらフィリピン語

F: になるんだけど, 定義としては生まれて一番最初に自然に覚えた言葉です。

A: ああ。

「母語」の定義を言う前に, 「自分の母語はフィリピン語」と答えているので, 自覚は強くもっている様子で力強い応答だった。ここでのフィリピン語はビサヤ語のこと。

(2) 日本語について

フィリピンでの家族での会話の言語について質問したあと, 亡くなったお父さん (日本語母語話者) との言語について質問した。

会話データ 2

F: うん。そこで思い出して欲しいんだけど, お父さんとは何語でしゃべってた?

A: お父さんとは。(沈黙 3 秒) なんか単語。

F: 単語, 何語の?

A: なんか日本語, 簡単なやつ。正直, 多分そんな。(沈黙 3 秒) そんなに? なんかめっちゃしゃべってではない。日本語わからんから。英語とか? ちょっとしゃべってたな。

F: 英語でしゃべった覚えがある。

A: うん, とお母さんが言ってて。お母さんが言った。

F: 話していたのはお母さんの話で。A の記憶はない。

A: うん, まあ, 例えば日本語しゃべる時とか, まあ「お金ちょーだい」はずっとずっと一生残ってる。

F: うん, フフフフ。

A: もうお金ちょうだい。

F: Bもそんなことを言っていたから、お父さんに、お金ちょうだいしか言うことはなかったみたいになって思ったんだけど。ハハハハ。

A: ハハハハ。ほんまに、そんぐらいの記憶しかないですね。

F: うーん、ちなみに、お父さんとお母さんが何語でしゃべったか覚えてる？

A: あー、これは、はい、日本語ですね。

F: あ、ちゃんと覚えてるんだ。

A: うん。でもその時その時、あの日本語わからなかったから、俺がお母さんが日本語しゃべる、しゃべる時の姿みたいな、なんかめっちゃ上手に聞こえるっすよね。

Aの記憶では、フィリピンにいた時に、故人となった父親と日本語で話していたかという問いかけに対して、「お金ちょうだい」しか覚えていないという。しかし、この「お金ちょうだい」と言って、お父さんがお小遣いをくれたことは、忘れられない思い出とも話している。フィリピンにいた時は日本語がわからず、父親とは日本語の単語で話した覚えはあると話している。母親Dが記憶している父親との会話は英語だったことは、Aの中では記憶にないようだ。

会話データ3

A: うん、それで、うん。ええまあ教室自分の教室行って、で、もう10分休み、みんなめっちゃ机、俺の机のまわりにめっちゃ集まってて。

F: うん。

A: で、何言ってるかわからん。

F: ハハハハハ。そっか、何言ってるかわかんない。

A: はい、はい。

F: うん、その時どんな感じだった？

A: どんな感じ？

F: うん、みんなが集まってきて。

A: ええ、ちょっとストレス溜まっていた。あの、あの悪い方じゃない。なんかちょっと何言ってるかわからんから、ちょっと申し訳ないですよ。

F: うーん。

A: なんかそれにちょっとストレス溜まったんでね。

F: うん。

A: みんなの言ってることがめっちゃ気になるんですよ。でも何を言ってるかわからんから。それでちょっとストレスが溜まっていた。

F: うん。その周りのお友達がそういう風に話しかけてきて、わかるようになったのって何か月ぐらい経って？

A: ああ、なんか5カ月ぐらいやったな。

F: そんなものでわかるの？

A: カタコトだったんですけど、うん。まあだいたい、うん、わかる、なんか、例えば国語の授

業とかで、みんな国語やっていて、俺だけなんか、ま、1年生、小学校の漢字、場合であるとか。

F：うん。うん。

A：そういうの結構あって。なんか漢字もできるようになったし。そっか。まあ、あの。〇〇みたいに、違う教室で、あと、英語もしゃべれる先生と、3人で3人。お兄ちゃん、弟、俺。（〇〇は高校のクラス名）

会話データ3は、フィリピンから日本へ来て、初めて小学校へ行った時の日本の学校の様子である。「ストレスたまる」という言い方は、Aは日常余り使用することのない表現である。小学校で転入してきた時は、言葉がわからなくて大変な思いをしたはずだが、そうしたことはほとんど言わず、むしろ短期間で日本語をマスターしたことを誇りに思っている様子がうかがえる。転入時の思い出を語る時には、辛かったことを振り返るというよりは、できなかった日本語ができるようになったという楽しい思い出を語る、明るさが感じられた。

会話データ4

F：はい、あのう日本語がね。すごく上手になったきっかけみたいなのある？

A：きっかけ？うん。ほんまに。あの友達としゃべったら。友達としゃべったおかげだと思う。

F：あー、なるほど。

A：はい。うん。

F：それはあのリアルっていうか、学校で。

A：学校で。

F：ネットの中とかじゃなくて。

A：あ、違います。学校で。なんか教えてくるんですよね。なんか例えば。ええーそれは？「放課後ってどういう意味」っていうと。

F：うん、うんうん。

A：なんか学校の終わりっていう、なんかそんな感じ。あーなんか。

F：うまいなー。私、放課後って言われてええと、とかって。After schoolかなとかって。でも簡単な日本語で教えてくれるんだ。

A：簡単、アーっていうのかな。うん。あ、それ。とりあえずだからわかりやすく説明するんですよ俺に。その日本語がわからなかった時。

Aとの通常の会話の中には、日本語の先生よりは、「友達が日本語を教えてくれた」というシーンが多く登場する。日本に来た当時の小学校での日本語の授業について聞くと、当時は外国ルーツの子どもの転校生に対して、日本語教員がカリキュラムに沿った教育をするというシステムは整っていなかったようで、Aの記憶では、英語のできる先生が英語を使って日本語を教えたり、小学校で習う漢字のドリルを自習していたとのことである（会話データ3）。授業の代わりに、友達との会話の中で日本語を覚えていった模様で、そのような活動を通して日本語を習得していったようである。子ども同士の会話の中で、簡単な日本語で説明してもらったことが印象深かったようだ。

(3) 英語及びビサヤ語について

L2にあたる英語については、自信をもった口調で話す。

会話データ 5

A:なんか日本来たらなんか、英語のレベルが下がると思って、あ、でも逆に上がってた、上がってきた。

F:そうだよ、それはね。でもね、あの普通は下がるね。だって今まで英語で授業してたのに。

A:そやねん。

F:どんどん下がる、英語で授業しなくなって、で、中学校の授業なんてそんなにAたちのレベルじゃないやん。

A:フフフフ。

F:だから、それはね、それを維持してきたのはA自身が偉いと思うよ、私は。

A:ああ、ありがとうございます。

中学校に入学してからは、学校では「日本語」を習う時間はなくなり、英語と実技教科以外は日本語がわからないために、定期テストで点数が取れない状況だった。そのような状況の中で、H塾の教師たちは、まずは得意な科目を伸ばして自信をもってもらいたいと、英語に関しては、絶対に自信をもつように指導してきた。時にはH塾で英語が苦手な日本人生徒に教えている光景も見られた。H塾に入るまでは、「日本語ができない自分」という自覚が強かったようだが、H塾では「英語がよくできる自分」という自覚ができてきたのではないかと考えられる。実際に中学校・高校の定期試験の英語の成績はトップクラスで、常に9割以上を点数している。中学3年の時に英検2級、高校2年で英検準1級に合格しており、本人も英語に関しては、自信をもっているように見受けられた。

会話データ 6

A:あのスムーズにしゃべれるのは日本語やと思う。

F:うん読んだりするのは？

A:読んだり書いたりするのは英語ですね。特に読むとき漢字がないんで。

F:そうだと思っていた私も。

A:しゃべる時は日本語。

F:G先生の授業でめっちゃわかってるのに。ということが最近ちょっと思い出した。

A:はい。

F:英語の方があの読解できているような気がする。

A:うん。

F:英語の試験とか全然怖くないでしょう？

A:ああ、ないですね。怖くない。

四技能について、話す・聞くは日本語、読み・書きは英語が得意であると自覚している。「G

先生の授業」というのは、高校1年の1学期に国語の日本語の教材を英訳した教材を用いて行った、H 塾の G 先生の英語による読解の授業である。G 先生の英語による授業を1時間受けたあとで、筆者の日本語の教材を使った日本語で読解の授業を受けたが、A は英語の教材では正確なのにも関わらず、日本語の教材では正解できていないことがあった。今回のインタビューで、A にとっては漢字の習得が読解の妨げの一因であることがわかった。

会話データ 7

A: ビサヤ語もまあ、ビサヤ語も忘れたくないですね。母語なんで。

F: 忘れたくない。そうだねえ。

A: まあ大切ですね。

F: 大切だよ、でもお母さんがビサヤ語ちゃんとね、母語話者だからね。お母さんはもう絶対忘れることはないし。

A: うんうん。ないです。

F: 今、C 君とビサヤではあんまり話さない？

A: 話さない。フウ。逆に、ビサヤ語でしゃべったら。なんか気まずい。逆に。

F: どうして？

A: いやわからん。なんか日本来た時は、日本来た時は、もうフィリピン語話すのはまあ当たり前で逆に。その、その時、そのころ日本語しゃべったら逆に気まずいんですよね。

F: うん。うん。今は逆？

A: 今は逆。

F: え、どうしたんやろ？

A: わからん、何でだろう。

F: 日本語上手になったからかな？

A: うーん。なんかわからん、なんで気まずいかわからへん。

ビサヤ語を大切にしたいという気持ちは、A はインタビュー時以外にも折に触れて筆者に話している。高校で母語（フィリピン語）の授業が始まった時には「(勉強することができるようになって) 助かった」と話している。会話データ 7 で使われている「気まずい」という言葉は、兄弟間で言葉が通じ合わないときにのみ使われている。本来の「雰囲気が悪い」という意味よりは、「意思疎通がうまくできない」という意味が強い言葉である。

(4) 将来について

将来、得意にしたい言語は何かを聞いた。

会話データ 8

F: ふんふん、わかった。さて、将来の話を聞きたいんです。将来何語？得意にしたい言葉は何ですか？

A: 将来？日本、あ、英語？

F: 英語?

A: 国際的の。

F: うん。

A: 言語やから。

F: なるほど。日本語は?

A: 日本語を上手にしたいですね、あのう、住むんだったら。上手にしたい。

F: 日本に住む?今のところ、Aの希望としては日本に住みたいと思っている?フィリピンに帰りたいと思っている?

A: ああ。まあ。今は日本に住みたいと思ってる。あ、でもまあ、何か、そうやなあ。大人とか、大人になったらまあ、海外って住めたりする?

将来、得意にしたい言語については、「日本語」と言いかけて「英語」と言い直している。英語に対するモチベーションは非常に高いように見受けられる。高校入学後は学校の授業とは別に、自ら進んでH塾の英語ネイティブ教師による授業を受けている。高校の教科としての「日本語」の成績も良好で、クラスのトップレベルである。日本語をしっかりと勉強したいという意欲は、高校入学後に顕著になり、日本語検定試験1級(N1)の合格を目指して継続的な勉強を続けている。将来は、学校を卒業後は、日本だけではなく、海外でも活躍したいという希望があり「大人になったら、海外って住めたりする?」という言葉には、日本だけではなく海外でも活躍したいというAの強い希望が感じられた。

会話データ9

F: なるほどね。えっと最後の質問なんだけど、もし答えられれば、Aは自分のこと日本人だと思ってる、フィリピン人だと思ってる?

A: 国籍を日本にしています。あ、日本にするとします。

F: 国籍は日本にするとする?今二重国籍だよ?

A: あ、はい。でなんかお母さんが質問したんですよ。なんか国籍どういふふうにする?まあ、日本って言って。でも。「正解」って言っていた。

F: お母さん、それでいいの?

A: うんまあ。あ、日本のパスポートで、日本のパスポートはいろんなアドバンテージ。もうほとんど、どこの国にも行けるから。192 やったかな?フィリピンのビザやったら、いちいち、多分少ないですよ、国がね。

国籍をどうするかについて、母親との間では話し合ったことがあり、Aの意志である「日本」という選択に母親は賛成している。日本国籍を選ぶ根拠は、ビザなしで行ける国が多いということで、「海外って住めたりする?」(会話データ8)と、将来、Aは海外でも活躍したいという希望がある。そのために、今の時点では、ビザなしで渡航ができる国が多い日本国籍を選択しようとしていると思われる。

会話データ 10

F: 国籍はだから, じゃあ日本っていうのはわかったけど, あの自分, 自分が何人かっていうアイデンティティ?

A: うん。うわ, うん。うーん。(5 秒沈黙) ハーフ。

F: じゃあ日本, 日本人 50%, フィリピン人 50%?

A: うーん, ほんまにそんな感じ。気分はそんな感じですね。

A は, 言語やアイデンティティに関するインタビュー自体は積極的に話し, 最後には「楽しかった, 自分を振り返る良い機会だった」と言っていたが, この質問の時だけは, 沈黙が長く, ためらいがちだった。

2 母親 D

ビサヤ語母語話者。大学で 2 年間日本語を勉強し, 卒業後来日。フィリピンに帰国後, 研究協力者である A の父親と結婚, その後死別し, 日本へ移住。ビサヤ語, 英語, 日本語を話す。インタビューには D の日常的な相談に対応している J さんが通訳として同席した。

(1) 母語について

母親に A の母語について, どのように記憶しているか聞いた。

会話データ 11

D: そうですね, あの, みんな一緒に住んでいるからやっぱり, 例えば, 子どもがおなかすくとき, 「おなかすいた」は言うけどお父さんが, hungry, 両方教えている。で, 子どもは私の子どもは, 妹と一緒に住んでいるからビサヤ語も「おなかすいた」のビサヤ語はわかっている。言葉は, まじっている。セブにいる時は, 子どもは, センテンス, big sentence は, 半分ビサヤ, 半分英語。(聞き取り不能), ビサヤと英語半分。ビサヤ半分英語半分。

F: 日本語は?

D: 日本語は, あまり, あの, お父さんと私いつも仕事行くから, あの, ヘルパーいつも頼んでいるから, やっぱり, ビサヤいつも聞く。子どもたち。で, 学校は, 英語。

F: ふーん, そうすると今おっしゃったように, ビサヤ語が半分, 英語が半分, 50%ぐらいで, 日本語がほんのちょっとだけ。

D: ちょっとだけ。お父さんが, 早く亡くなったからやっぱり, もう覚えられないですね。日本来て, またどんどん覚えました。

10 歳の時に来日するまで, A は, 父母, 母の妹, 兄弟 3 人の 6 人家族でセブ島で暮らしていた。フィリピンでは家庭内での言語は, 兄弟が 3 歳になって幼稚園に行くまではビサヤ語が使われていた。フィリピンでは幼稚園では英語が使われるので幼稚園以降は, 家庭内でもビサヤ語と英語が半々になっていった。年子の 3 人兄弟なので, 兄 C が幼稚園に入園して英語を話すようになると, 弟の A・B にも影響を与えたのではないかと推察される。翌年には A も入園して英

語を話すようになる。家庭内での使用言語はビサヤ語だけから、だんだんと英語が入ってきたのではないかと推測される。Aにお父さんと日本語を話したという記憶はほとんどない(会話データ2)。母親も子どもたちと父親が日本語で話していたことについて「ほんのちょっとだけ」と話している。

(2) 日本語について

母親にAに得意になってもらいたいと思っている言語について聞いた。

会話データ 12

- F: 将来, 子どもたちにどの言語を重視して勉強してもらいたいと思っていच्छいますか?
D: Japanese first and second English. Because 今日本にいますからこっちに住んでるからこっちで生活するんだったら, 子どもの将来のために日本語がいいかなと思います。
F: Aが, えっと。日本に初めて来た時に, 今日から日本で生活をするから, 日本語を一番ちゃんと勉強しなさいってお母さんに言われた。だから今まで僕は日本語頑張ってきたっていうふうに, あのう, 言ってるんですね。あの一, それは日本に来た時からもう。だから日本語で一番頑張りなさいっていうのは, ずっと思っていच्छる。
D: ずっと日本でと思います。
F: ビサヤ語は?
D: ビサヤ語を忘れた問題ですね。それでもやっぱり兄弟は3人だけ日本人。みんなのいとこ全部フィリピン人だから, フィリピンに帰ったらビサヤ語忘れてたらもう英語しかないですね。英語は英語で使う。いとこみんな, 英語しゃべれるから英語にするかなあ。もし, ビサヤ語忘れてたら仕方ないから。
F: 仕方ない?
D: うん, もう仕方ない。ビサヤ語も忘れてるから, 3人兄弟これから大きくなったら, 遊びに行く, フィリピン, ビサヤ語忘れてたら英語で。
J: 必ずしもビサヤを覚えてもらわんと, というほどではない。

母親の希望として, 母語としてのビサヤ語を大切にという思いは少なく, むしろ日本で暮らしていくのだから日本語を頑張ってほしいとの気持ちが強いように感じられた。「ビサヤ語は忘れても仕方ない」という言葉はインタビューの最中に何回か発せられた。現在, 母親と子どもたちのコミュニケーションは, 英語がメインでそれに日本語とビサヤ語も少し使いながら円滑に進められている。また, 親戚との付き合いは, ビサヤ語ができなくても英語でも大丈夫というのが, 忘れてほしくないけれども忘れても「仕方ない」という発言につながっているのではないかと推測できる。

(3) 英語及びビサヤ語について

母親に, 家族内で使われている言語について聞いた。

会話データ 13

F: 家族のラインは?

J: 家族のラインはね。

F: 英語なんですか?

J: 全部英語です。

D: 私, 英語で。

F: うわー, すごい。うちでやったら意味不明になっちゃう, フフフフ。

J: C はわかる?

K: C はわかる。

J: だから, C さんと話したりするのは, ビサヤだけれども, ラインなんかは, 英語。ビサヤで書いてもいろんなもの, ライン, グループラインだから。

D: うん, みんなでわかるように。

J: そうすると, A, B 君がビサヤがわからないから。そうするとみんながわかるのは, 英語。

F: ああ, なるほど。

J: お母さん, 英語で書くの一番楽だし。

F: ふーん。

D: おもしろいのは, 私英語で, そしたら, C, 返事は漢字。私なにこれーハハハハ。

F: ハハハハ。

D: なんで漢字ー。ハハハハ。

J さんは, D さん一家の生活全般の相談に乗っているので, 家族の言語の事情も良く知っている。D さん家族のラインは, 英語で主にやり取りされている。7 行目は, 「C (兄) は (ビサヤ語は) わかる?」の意味で, 母親は C は, ビサヤ語はわかると答えている。母親によると, インタビュー当時, 兄弟のビサヤ語の使用状況は, C は読む書く話す聞くができる, A は読む話すができる。B (弟) はほとんどわからないという状況であった。

(4) 将来について

母親として, A の将来に希望する点を聞いた。

会話データ 14

F: お子さんたちの今後のことについてお聞きしたいんですけども。ええと, 日本で進学させたいか, 日本で就職するか, あるいはフィリピンに帰るといふ予定があるかもしれないなと思っ
ていたんですけども, ええと将来については今のところどういうふうにご考えておられますか?

D: Regarding the children's future education (聞き取り不能)

J: How do you think about son's future?

D: Yeah

J: In Japan, enter the university in Japan and find a job in Japan?

D: Yeah.

J : (聞き取り不能) or have so (聞き取り不能) uhh, you know, idea go back to Philippine or ?

D : If I have to be palo- follow as a mother I should umm I should prepare that my son will go in the higher education for them to have a high, to have a good umm better future (J : where?) and then (J : in, in Japan?) in Japan, because if, in the Philippines umm it's hard for them to adjust "sensei" since umm th- we since we stay here more a period of six years maybe they cannot adjust the situation mm so here in Japan umm I prefer it to be to go in the higher education and then employment yeah.

J : Then find a job? (D : for me, I have) Where?

D : to have um work um my son work here in Japan, (聞き取り不能 employability?) in Japan

J : あの、だから息子さんたちには、いずれも、あの、日本で高等教育を受けて、それで日本で仕事を見つけてほしいと思っている。How about the, what about the idea go back to Philippine?

D : Mm 将来 example if umm if they finish their education and then umm they enter a good company a good company and a big company in Japan and if they have a position, example there, there is a branch in the Philippines or they want to work in the Philippines and connection with Jap-, Japan companies it's also a bi- it's also a good deal but it depends upon the, upon the decision of my son if they will go back there or not. For me, for me because this question is for me so I should umm choose they will stay here in, in the Jap- in Jap- here in Japan than in Philippines.

J : ですから、お母さんとしては、日本で高等教育を受けて、就職して、もし、その日本で良い会社に入って、その会社がフィリピンに進出するとか、あっちに支店があるとか、日本と関係もってフィリピン行くのなら、それもありかな。という風に考えていますけれども、それは母親の考えで、子どもたちが決めることだとは思っていると。

このインタビューでは、子どもの将来のような複雑な話題になると、英語に移行する傾向があった。母親は子どもの将来像について「日本の企業に入って、フィリピンに支店があったり、フィリピンで働きたいと思ったり、日本の会社とつながりがあれば、それもいい考えだと思う」としている。「日本に6年いるので、フィリピンの社会には適応できないのでは」という思いもあり、母親の現在の希望は、日本の大学から日本の企業への就職が根底にあり、その上でフィリピンと関係できればいいと述べている。ただし「フィリピンに戻るかどうかは、息子の選択次第だ」と子どもの意志を尊重する発言もあった。

3 高校の担任 E 先生

日本語母語話者。関西圏の公立高校の日本語指導特別枠入学者クラス（以下、日本語指導クラスとする）の担任。英語・日本語の教員。日本語、英語、ポルトガル語を話す。

(1) 母語について

高校の担任として、母語についてどう考えるのかを聞いた。

会話データ 15

F:あの母語っていうカリキュラムを入れたのは、これはどういう経緯で?

E:●●は母語も大切に。あの日本語だけに特化しない、両方の言語を伸ばしていかないと。なんでしょう。言語習得は進まないじゃないですけど、止まってしまうというのがあって。元々始まったのは、親子間でのコミュニケーションが取れなくなるっていうのがあって、それはダメだろうっていうので、母語の時間ができたんですけど。●●が特別枠を作った時から母語の時間は設けられています。(●●は地方自治体名)

F:Aから時間割を見せてもらった時に、母語の時間あるやん、よかったね。っていうのは、お母さんしか先生がいなくて、なかなか周りに。ラーメン店主の奥さんがタガログ語をしゃべるからわざわざそのラーメン屋さんに連れてくみたいなのを、あのあったみたいなんですけど。

E:そうなんです。いや、でもなんか母語の授業はもちろん、その二言語勉強するのは大事なんですけど、そこでこうストレス発散だったり、普段私たちに言えない悩みを先生と話せたり、そういうのも必要ですよ。Aは日本語もできるから、いいんですけど。できないでこう伝えられないで、苦しい子たちもきつっていると思うので。

F:あのこの間の授業では、Cくんは先生と日本語でやり取りしてるんですけど、他の子はタガログ語だったんで、この子たちにとって、タガログ語で、自由にキヤーカー言える場所って、この2時間だけなんだろうなと思ってますね。それが、もうそのすごく、生き生きしてたので。

E:楽しみにしていますね。タガログ語だけではなくて、全部の言語の先生が来るのを楽しみにしています。

この地方自治体の公立高校の日本語指導を必要とする生徒のクラスでは、時間割の中に週に2時間「母語」の時間があり、ネイティブの先生が授業を行っている。Aは「フィリピン語」の授業で、タガログ語・ビサヤ語をはじめ、フィリピンの歴史や地理、民族舞踊などを学んでいる。

(2) 日本語について

高校の担任として、Aの日本語についてどう考えているかを聞いた。

会話データ 16

F:このあと10点分ぐらいっていうのが、何が弱かったんでしょう。あの70点で80点だったら一般クラスだったのっていう。

E:最初のテストですか。ちょっと問題あったなあ、もってきます。

F:すいません。

(E先生が問題を持ってくる)

E:やっぱり漢字なんですけれど。

F:やっぱり、漢字ですか。

E:72点。この前半は、ほんま大丈夫なんですけど。ここですね。

F:「コウエン」(講演が正しい漢字で書けていない)が変になってしまっている?

E:はい、フフフフ、そう、意外と(沈黙2秒)できなかった。

F: 惜しいんですけどね。気持ちとしてはわかるんですが、はあー、漢字の書き、読みはどうですか？

E: 読みはまあ、読めてたりするけど、書けないんですね。ちょっとあまり「カンキョウ」「カンキョウ」(同音異義語が間違っている)になって、こっちの方がもっと簡単なので。3年生以降ぐらいの漢字で。

F: 小学3年生以降？うーん。

E: これCのです。問題全く一緒なので。

F: C君のは、うーん、じゃあ、漢字を一緒に頑張るか。

E: 「健康」とかはね、全然問題ない。ここはちょっと意味がわかりにくかったりするの。

F: うん。読解できるのですか？

E: 読解できます。あ、でもこれはまあ、そんな難しくないです。

Cは80点超えてるので、一応、原学級の授業受けて、えっと1年生は4時間国語の授業があって2時間原学級、1時間、その反対の2時間で授業のフォローをやって授業に臨むっていう形で原学級に戻ってる人たちでも、その授業のフォローをしてできるようにして、最終的に大学に行くで一斉授業になるので、取り出しばかりしていると、それはそれで将来ね。ちょっと大学行った時に困らないかなっていう心配もあって。

F: そうですね、はい。

E: でもそのままちゃんとフォローは1時間とかとって、もう1回別クラスでやっているの、できるのはやっぱり本人のあの自信にも繋がっていくし、っていうのもあって、なるべく原学級に戻そうっていうのはあるんですけども。

高校入学時に、クラス分けのための日本語のテストの得点について説明してもらった。兄のCは80点だったが、Aは72点だった。80点だと国語を日本人と同じ原学級で受講するが、Aは日本語指導が必要なクラスの国語授業を受けている。日本語テストの点数が低かった原因は、漢字の「書き」ができていなかったからであるという。

同高校では、原学級の国語の授業を受ける場合でも、日本語指導が必要な生徒には、授業をフォローする時間を設けている。大学進学後も見据えて、取り出し授業と、原学級で受ける授業の形態は、生徒が自信をもって取り組めるように配慮されていると感じた。

(3) 将来について

日本語指導クラスの生徒たちの進路と、Aの進路の見通しについて聞いた。

会話データ 17

F: 日本語指導クラスの子たち(の進学状況)ってどんな感じですか？

E: ほとんど、進学です。就職はあまりないです。

F: そうですか。何パーセントぐらい

E: 去年は、1人専門学校。1人はちょっとまだ進路が定まらないので、大学進学しないんですけど、それ以外は全員進学。

(中略)

F: 専門学校じゃなくて大学ですか? 安心しました。受かりますか?

E: 絶対に受かります。はい、大丈夫です。

高校の、日本語クラスの生徒の進路状況について、大学進学率は高いことがわかった。最後の言葉はきっぱりと、自信をもって発言された。

4 高校のフィリピン語担当 I 先生

I 先生は、フィリピン語母語話者 (イロカノ語)。タガログ語、ビサヤ語、英語、日本語を話す。来日して 36 年、府立高校で母語の授業を担当して 6 年になる。母語 (フィリピン語) の授業は主に英語で行い、言語だけではなく、歴史や地理、民俗舞踊なども教える。

(1) 母語について

日本の高校でフィリピン語を教えるにあたって、重視する点を聞いた。

会話データ 18

F: セブアノ語は誰も教えられないので。

I: セブアノ語は、お母さんと会話ができればそれでいい。私もそれで育てたから別に、誰に教えてもらったわけではないし、あの一、自然に、私みたいな存在に話す話す、いっぱい話す。話して覚えるから。もともと自分たちは、わかっているから、bace ね。忘れないように、たまに人と話す。会話、勉強じゃなくて会話。

F: やっぱり会話ですか。

I: 文法はもう、ややこしいから、みんなが通じ合えばいいと思います。文法的には別にもう気にしない。

I 先生自身は、日本語は学校に通って習ったことはなくて、夫からや、日本社会で暮らすうちに身に付けたという。母語のクラスの授業目標は、「家族と会話ができること」ということで、話すことつまりコミュニケーションを重視しているという。その方針は「勉強じゃなくて会話」という言葉に端的に現れている。

(2) 日本語について

I 先生から見た、A と C (兄) の日本語の状況について聞いた。

会話データ 19

I: たぶん、兄弟 3 人日本語で話していると思います。

F: 兄弟はもう日本語です。

I: C と A はお母さんとはビサヤ語で話しているみたいですよ。

F: 今までの子の例でいくと、今日の今日の、他の 2 人の子はタガログ語で、日本語あまりわか

らないですね。私が日本語で話しかけても。

I: そうですね, はい, はい。Cの方が日本語高いですね。

F: あ, そうですか。あの子たちは, 今までの例でいうと, フィリピンの子たちって, その, フィリピン語をだんだん失って日本語が上手になって, 日本社会に溶け込んでいくのか, それとも今日の子たちみたいに, フィリピン語が強くなって, でも日本語あまりできなくて, そのままいくのか, どういうパターンが多いのでしょうか?

I: そうですねえ。うーん, 今, 両方うまくいっている子たちもいるし,

F: バイリンガルになる子もいる。

I: そうですね。で, 英語, あっちがうわ。日本語うまくいって, 母語忘れていくのが,

F: 多いですか。

I: そういうパターンが今, うーん。日本で勉強しようと思ったら一生懸命日本語, みんな必死。でも今度フィリピン語で話す機会があれば。去年, おとし卒業した子, 今私連絡あるけれど, 忘れていないね。上手にタガログ話していますね。

F: 連絡というのはラインとかで?

I: そうですね。

F: タガログ語で?

I: タガログ語やら, 英語やら, 日本語やら。

インタビュー当日, 筆者が見学させてもらった, Cのクラスの母語の授業では, Cの他に2人のタガログ語母語話者の生徒がいたが, Cは2人とはほとんど話さず, I先生とは日本語で話していた。卒業生の中には, 日本語ができるようになって, 英語やタガログ語を切り替えてコミュニケーションする生徒もいるという。

(3) 将来について

I先生に将来的に, Aに母語をどの程度保持してほしいかについて聞いた。

会話データ 20

I: 母語, もちろん忘れてほしくないけど, 今, これだけ話しできないけど, いざ, フィリピンに行ったら, しばらくしたら思い出しますよ, そんなもんですよ。

F: じゃあ, 従兄弟と話せなくなるのが心配って言っていましたが, そんなこともない?

I: ああ, はい。行って, しばらく経てば, 多分, べらべらしゃべるんちがいますか。

F: ハハハハ, そうですか。

I: 自分の経験ではそうです。忘れないからね。

I先生は, 母語の保持について楽観的で, 忘れることがあっても, フィリピンに行けば話すことができる, 忘れない, と話した。

会話データ 21

I: フィリピン人の強いところかもしれませんが、言葉を覚えるのは。フィリピン国内だけでもいろいろな言葉があるから、他の国行くときは、速い、覚えるのが。慣れているんだと思います。

F: Aが、すごく英語も日本語も語学のセンスがいいなって思われることがあるんですけど。それってやっぱり、フィリピン人ってみんなそうなんですか？

I: ハハハハ。みんな英語は通じるんだけど、文法的にやばいのが多いんですよ。でもまあ、通じればいいんじゃない。文法的にしようと思ったら、みんな難しい。

フィリピンという国の特性として、7000もの島があり、島ごとに言葉があるといわれるくらい、国民が多様な言語を話し、しかし、小学校から英語で授業をするという、多言語国家であることが挙げられる⁶⁾。I先生はそうした、フィリピン人の特性を「文法はやバイ」としながらも明るく分析している。

インタビューの結果、本人が将来のために今後、もっとも伸ばしたいと思っている言語は英語であり、日本語も日本で住むには必要と感じている。母語のビサヤ語に関してもA本人は大切に思っているが、母親は「(失っても)仕方ない」、母語の先生は「話せばいい」と、Aの周囲の人の母語維持の希望は必ずしも高くはないことがわかった。

IV 考察

母語がビサヤ語で第二言語が英語のAが日本で暮らしていく中で、どの言語が優勢になるのかについて、インタビューデータに基づいて考察する。インタビュー調査で明らかにしたいことは、当初、どの言語が優勢かという端的なものだったが、研究が進むにしたがって、「自分の存在の主張、確認、自分の価値の証明をどの言葉を使って行うか」という言語的アイデンティティの変更のきっかけとなったできごと、その変遷を明らかにしたいと考えた。本人以外の、関係者（母親、先生）に関しては、Aにどの言語に力を入れてほしいと考えているかを聞いた。A本人、母親D、高校の担任E先生、高校の母語（フィリピノ語）の担当I先生の4人のインタビュー結果について、ライフストーリー・インタビュー法の手法で考察する。

1 Aの使用言語の変遷と5つの転機

A及び母親へのインタビューをもとに、Aの使用言語の変遷をまとめた。

表1 Aの使用言語の変遷

言語の順位	0～6歳		6～10歳		10～16歳（現在）	
	家庭内	家庭内	学校	家庭内		学校
				対母親	兄弟間	
1	ビサヤ語	ビサヤ語	英語	ビサヤ語	日本語	日本語
2	日本語	英語		英語	英語	
3		日本語				

10歳まではフィリピンで育ち、家庭内で話されるビサヤ語が優勢だった。本人も「母語はビサヤ」と認識している。幼稚園入園後から英語での教育が始まり、小学校入学後に本格的な英語での教育が始まる。Aの第1の転機は小学校に入学し、英語で教育を受け始めた6歳の時である。Aらが通っていたフィリピンの小学校は厳格で「学校の敷地内では友達と話すときも英語」という規則があったという。Aは当時から英語を使うのは苦にならなかったようで、「放課後に(学校の外で)友達と話す時も俺は英語だった」と話している。一方、父親と話す時の日本語は「単語」だったという。父親と話した日本語の会話で記憶に残っているのは「お金ちょうだい」だけである。

10歳の時に父親が亡くなり、母親と兄、弟の4人で日本に移住する。これが、第2の転機になる。日本の小学校に転校してきた時のあいさつは、英語で行い、それを小学校の先生が通訳した。転校初日、日本人の同級生に机の周りを囲まれたが「何を言っているのかわからず、ストレスだった」と話している。その後、5カ月ぐらいで周囲の言うことがわかるようになった、と話している。この時点が第3の転機であると考えられる。Aは「日本語は友達に教えてもらった」と話す通り、5カ月間で日本語会話力はほぼゼロから、日常生活に不自由しない程度に上達したと思われる。この間、学校では日本語教師による日本語の授業はほとんど行われておらず、英語を話せる先生が何らかの日本語指導をしていたようである。来日して5カ月が経って、日常の日本語会話ができるようになったことで、Aは、母語であり母親とのコミュニケーションツールであったビサヤ語から離れ、日本語が生活の主流になったという点で第3の転機といえる。

兄弟間の会話は、日本に来た当初はビサヤ語だった(会話データ7)。来日後5カ月ほどで、ビサヤ語は兄弟間のコミュニケーション言語ではなくなり、母親とのみ会話するときの言語として残った。代わって日本語が兄弟間のコミュニケーションツールとなっている。

第4の転機は、15歳(中学3年)で、H塾に入塾し、ネイティブの英語教師の授業を受け始めたころである。それまでは、「日本語ができない子」であったのが、H塾の講師たちが「英語がすごくよくできる」と誉め続け、中学3年で英検2級に合格した。TOWL3⁷⁾の結果から、中学3年の時期にも、学年相当以上の英語力を保っていた。このころ、「英語ができる」という自信が芽生え始めたのではないかと推測する。

第5の転機は、高校入学後である。日本語指導が必要な生徒のクラスで、Aの日本語の実力はクラスではトップで、日本語にも自信を持ち、英語以外の科目の点数も伸びてきた。また、カリキュラムのひとつとして母語(フィリピン語)の授業が始まった。フィリピン語の授業があると知った時のAの最初の一言は「良かった、助かった」であった。ビサヤ語をあまり使わないので、忘れていくという自覚があり、母語を忘れないようにしたいという思いがあったと推測する。5つの転機を表2にまとめる。

表 2 A の言語の 5 つの転機

転機	年齢	できごと
1	6歳	家庭内で母語・ピサヤ語だけの状態から、小学校に入学し、英語で教育を受け始める。
2	10歳6カ月	父親が死去し、母親Dと兄C、弟Bの4人で日本に移住する。日本の小学校に転校してきた時のあいさつは、英語で行った。
3	10歳11カ月	5カ月後、日本語の日常会話を習得した。日本語会話ができるようになったことで、Aは母語であり母親Dとのコミュニケーションツールであったピサヤ語から離れ、日本語が生活の主流になった。
4	15歳	H塾に入塾し、ネイティブの英語教師の授業を受け始めた。それまでは「日本語ができない子」であったのが、E塾の講師たちから「英語がよくできる子」と評価されるようになった。英検2級に合格し英語に自信をもつようになった。
5	16歳	高校入学後。日本語指導が必要な生徒のクラスで、Aの日本語の実力はトップで、英語以外の科目の点数も伸びてきた。

以上から A には 5 つの転機があり、それぞれの転機で言語の使用状況が変化している。

本研究の結果、読む書く聞く話すの 4 つの能力によって多少の差はあるが、現在の A の言語能力は、①英語は学校の成績も良好である。TOWL3 テストで学年相当以上の英語力があると判断された。②日本語はクラスではトップレベルである。学校の教科全体の成績は学年でも上位に位置している。日常会話では不自由はないが漢字の「書き」が苦手である。③ピサヤ語では、母親や先生と話す、ラインで簡単な文を書くことはできるが、英語、日本語と比べると弱い、の順番であると推測できる。そして、A 自身が得意にしたい言語の順番は、①英語、②日本語、③ピサヤ語であるとまとめられる。

2 母親 D

A の第 3 の転機に関連して、日本語を習得するとともに、ピサヤ語を使う機会が減少している。一番、重視してもらいたい言語には英語ではなく日本語を挙げている (会話データ 12)。母親は日本に来てから、「日本語を頑張るように」と子どもたちに話している。現在、家族間のコミュニケーションは、弟 B がピサヤ語がほとんどできなくなっている関係で、英語が主である。「ピサヤ語忘れたら仕方ないから」という母親は特に、悲しそうではなくさばさばとした表情だった。最後の通訳の J さんの「必ずしもピサヤを覚えてもらわんと、というほどではない。」(会話データ 12) という言葉に、母親が深くうなずいていたのが印象的だった。インタビュー後に J さんから聞いたところ、母親がそう考える理由は自身も複数言語話者なので、ひとつぐらい共通の言語がなくなっても仕方がない、そう大きな問題ではないととらえているのではないかということであった。

3 高校の担任E先生

Aの第5の転機、高校での母語の授業の位置づけについては、会話データ15で述べられている。母語の授業の重要性について、「言語勉強するのは大事なんですけど、そこでこうストレス発散だったり、普段私たちに言えない悩みを先生と話せたり、そういうのも必要ですよ」としている。

日本語指導を必要とする生徒にとっての母語の時間は、言語を勉強する以上に、ストレス発散をしたり、母語で悩みを相談する大切な時間になっていると指摘している。また、このクラスの生徒は自分の母語だけではなく、他の言語にも強い興味関心を抱いていることがわかる。

4 高校のフィリピン語担当I先生

Aの第5の転機、高校での母語の授業の位置づけについて（会話データ18, 19）。高校での母語の授業は、Aの第5の転機である。Aはそれまで、日本語と英語しか習うことができなかったのが、ビサヤ語を習うことができるようになったことを喜んでいて、I先生の教育方針は文法よりも会話ができるように、ということで、親子の間の言語を大事にしたいとのことだった。

会話データ21のI先生の「他の国行く時は、速い、覚えるのが。慣れているんだと思います」という言葉は、データとしての裏付けはないが、A・B兄弟の成長を見ていると実感させられる言葉である。

5 研究課題に関する考察

本研究の研究課題は、母語がビサヤ語、第二言語が英語の子どもが日本で暮らしていく中で、どのような言語選択をするのか、言語的アイデンティティはどのように変化するかを明らかにすることだった。

インタビューでは、A本人は、母語はビサヤ語であると自覚しており、母語を大切にしたいという気持ちは強くある。英語は、自分の中で、できるという自信をもっており、将来の職業のために英語を勉強したいという意欲は高い。また、家族全員のコミュニケーションツールであるラインは、ほとんど英語であり、家族の言語としてはビサヤ語に代わって、英語が重要な位置を占めている。日本語については、日本に住んでいるから日本語は大事という気持ちは強い。現在の高校の日本語指導が必要な生徒のクラスでは、日本語はトップレベルであり、教科全体の成績も良好なので、日本語のモチベーションも高校入学後、高くなっている。一方、ビサヤ語に関しては、母親との大切なコミュニケーション言語だが、母親、I先生ともに「ビサヤ語は忘れても仕方がない」というあきらめを表現している。つまり、Aは、母語はビサヤ語であるというアイデンティティは形成されているが、ビサヤ語は現在の日常生活で頻繁に使う言語ではないので、使用したり学習したりする言語としてのビサヤ語は、相対的な優先度が下がってきている。それを強めているのが、英語の成績が良いこと、高校では日本語が良くできるという評価ではないかと推察される。Aの現状は、日本社会で生活するために日本語や英語の優先度が高くなっていると推察される。

山本（2010, 2013）は「言語の威信性」に関して、「相対的評価」と「非対称的片方向性」について、威信性の高い言語の組み合わせのバイリンガルが高い評価を得、威信性の高い言語は

他者からバイリンガルになることを期待されるとしている。日本ではビサヤ語の威信性が低い
のに対し、英語の威信性が高い。日本語とのバイリンガルの組み合わせとして威信性の高い英
語が選択され、これがAの言語選択に影響していると考えられる。

中川（2011）では、母語に対する肯定意識の形成に関して両親との関係性の構築が挙げられ
ているが、本研究では母親との関係性の構築のための母語という点は、重視されなかったとみ
られる。

6 今後の課題

今後も縦断研究を続け、思春期の期間を通しての外国ルーツ高校生の言語選択と言語的アイ
デンティティの変化を探っていきたい。また、何が言語選択に影響を与えているかの要因を探
るために、SNSや友人関係など日常生活の中での言語の使用について、インタビューなどで焦
点をあてていきたい。

*本研究は、田浦秀幸教授の研究プロジェクトの一部として行われた（立命館大学における人
を対象とする研究審査 衣笠-人-2020-4）、2022年度立命館大学言語教育情報研究科修士論文を
もとに、加筆・修正したものである。研究協力者である、Aさん、お母様、高校の担任の先生、
母語の先生、通訳を引き受けてくださったJさん、H塾関係者、記して感謝の気持ちといたし
ます。研究協力者には謝金に代わるお礼の品をお渡ししている。

注

- 1) 「Japanese as a Second Language」(第二言語としての日本語)
- 2) 森山卓郎・渋谷勝己編『明解日本語学辞典』(2020)三省堂、p57
- 3) フィリピンで使用される主要言語のひとつ。ビサヤ語はセブアノ語の別称。フィリピンでは、87の
言語が話されており、主な言語グループは、タガログ（マニラ周辺）、セブアノ（ビサヤ地方）、イロカノ
（北部ルソン）、ピコール（南部ルソン）、ワライ、パンガシナン、マラナオなど。タガログを基礎とす
るフィリピン語を公用語に定めている。（在日フィリピン大使館 HP「フィリピンの基礎知識」[https://
philippinetravel.jp/about/basic/](https://philippinetravel.jp/about/basic/) 最終閲覧 2024年3月14日）
- 4) 同上 2)
- 5) 文部科学省 HP「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果報告書（本編）」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/genjyou/1295897.htm（2024年3月14日最終閲覧）
- 6) 在日フィリピン大使館 HP「フィリピンの基礎知識」
<https://philippinetravel.jp/about/basic/>（最終閲覧 2024年3月14日）
- 7) 米国で開発されたテストで、英語母語話者の年齢相当を算出できる Test of Written Language-3 (Hammill
& Larsen, 1996, 以下, TOWL3 とする) を用いた。TOWL3 は、絵を見て、15分間で自由に作文を書き、
作文を英語ライティング基本 (Contextual Conventions)、文法等 (Contextual Language)、及びストーリー
構築 (Story Construction) の3つの分野についてそれぞれ点数化し、さらに年齢による調整を行って
偏差値を算出し、英語母語話者の年齢で何歳に相当するかを算出できるテストである。

参考文献

生田裕子 (2002). 「ブラジル人中学生の第一言語能力と第二言語能力の関係—作文のタスクを通して」、『世

- 界の日本語教育』, 12, 63-77
- 石川朝子・榎井縁・比嘉康則・山本晃輔 (2020). 「外国人生徒の進学システムに関する比較研究 神奈川県と大阪府の特別枠校の分析から」, 未来共創, 7, 193 - 220
- 小野原信善 (2004). 「アイデンティティ試論 フィリピンの言語意識調査から」, 小野原信善・大原始子編著『ことばとアイデンティティ』, 三元社, 15-51
- 桜井厚 (2002). 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』, せりか書房
- 中川康弘 (2011). 「ベトナム難民2世の語りにもみるバイリンガル育成の可能性—ライフストーリー・インタビュー手法を用いて」, 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』, 7, 66-86
- 山本雅代 (2010). 「バイリンガリズム：モノリンガルの視点からの脱却」, 西原鈴子 (編) 『言語と社会・教育』, 朝倉書店, 193-212
- 山本雅代 (2013). 「日本語—フィリピン諸語異言語間家族の言語使用状況—「言語の威信性」を枠組みに」, 『関西学院大学国際学研究』, 2.1, 9-19
- Hammill, D.D., & Larsen, S.C. (1996). Test of Written Language. Austin, TX: PRO-ED.